
君を探して

舞湖 早紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を探して

【著者名】

舞湖 早紀

Z5559X

【あらすじ】

ついに黒の組織を壊滅させ、灰原が作った解毒薬によって元の姿に戻った新一。ぎりぎり留年をまぬがれた新一は、普通の学校生活を送る。一はずだった。なのに、彼はある日事件の帰りに交通事故にあつてしまつ。

病院で目を覚ました彼は、記憶を失い、下半身も動かなくなつてしまつ。それは、命の代償としては重すぎるものだった。

一生車いすの生活を送ることになつてしまつた彼は、母の有希子と父の優作によって誰にも内緒で口入に連れて行かれる。

- 2年後。未だに新一を探していた蘭は、大学の留学先であるロス
で車いすに乗つた新一を見つける。すぐ隣にある大学に彼が通つて
いることを知り、彼の家を探し当てる。そこにいた有希子に、蘭は
衝撃の事実を伝えられる——

ついに、新一はFBIの助けもあり黒の組織を壊滅させた。
その後APT-X^{アポートキシン}4869のデータも見つかり、灰原に作つてもらつた解毒剤により元の体に戻る。

そうしてぎりぎり留年を防ぎ、無事高校3年生に進学した新一であったが、先生から授業中に事件に行かないという条件があつたため今は普通に学校生活を過ごしている。

そんな夏のある日である。

#~~~~#

「相変わらず暑っちゃいなー夏は。」

だらだら汗をかいている新一が言った。

今日は真夏の猛暑日。

気温は35度を超えており、道にはほとんど人がいない。きつと皆家でクーラーの効いた部屋で涼んでいるのだ。太陽に向かつて咲くひまわりがまぶしく見えるほどだ。

「そうだね。早く家に帰りたい！」

隣にいるのは蘭。

ちょうど一人で学校から帰つていると、新一だった。

「じゃあ、また後でな！」

「うん。また後で！」

そう言つて一人は別れる。

実は、蘭がこの前新一に告白の返事をして、めでたく一人はカップルとなつた。

といっても、そんなにカップルっぽくないのだが……。

別れてから足早に家に向かつた新一は、いきなりびっくりする」となる。

彼が「ただいま」と言つてドアを開ける。

すると・・・・

「お帰り、新ちゃん！」

いきなり母の有希子が抱きついてきた。

「げつ！・・・てゆうかなんでいるんだよ！？」

「何、げつ！つて。私の家であるこの家にいちゃだめなの？」

有希子は鋭く新一をにらむ。

「べ、別にそういうわけじゃ……」

「冗談よ冗談……そういうえば、新ちゃん蘭ひやんと回思ひになつたそ
うじゃないの。よかつたわね！」

「……まあ。」

「ひいり有希子がほほえむ。」

「何よ～今日はやけに素直じゃない。だつて……」

その時――

ブルルルルル

新一の携帯が鳴った。

「あ、ちょっと悪い……もしもし。」

『おー工藤君。もう学校は終わったかね？』

日暮警部からだつた。

一応警察も事情を知つてるので、少し電話をかけるのをためらつ
たようだ。

「はい。もしかして、事件ですか？」

『その通りなんだ。今から来てくれるか？』

「わかりました。場所はどこですか？』

『杯戸町1丁目の1の35だ。』

「では、今から向きます。」

そう言って電話を切つた。

「新ちゃん、事件なの？」

怪訝そうに有希子が聞く。

「ああ。今から行つてくる……つてヤベ……今日は蘭とでか

ける約束してたんだつた。」とわらねえと・・・・・

そして、もう一度携帯を開き、電話をかける。

「一方、蘭の家では

「あれ、電話だ。」

まだ制服を着替えてなかつた蘭は、そのまま携帯をとる。

【着信・工藤新一】

「もしもしし、どうしたの?」

『実は、事件が入つて・・・・』

『また事件?この前もそつだつたじやない。』

不機嫌になる蘭。

『悪い、だけどどうしても・・・・』

「わかつたわよ。だけど、気をつけて行つてきてね?平成のホーム

ズさん。』

『悪い。じや』

彼は電話を切つた。

「ふう・・・・」

蘭はため息をつく。

いつもこいつだ。

今度こそはとと思うと、必ずその日に事件に新一が呼ばれる。でも、今日だけは嫌な予感がした。

そう。1年くらい前に1度彼がいなくなつたときのよう。結局、彼は何があつたのか話してくれなかつた。いつもはぐらかされて。

ー ものの感は、つこに約中してしまつのである。

そして、上藤新一は日本から姿を消す。

1～この曲の印象（後書き）

「なんていっても」

舞湖早紀です。

とりあえず、この作品が2作目となります。
たぶんこの話はだらだらと続くと思いますので、最後までおつきあいお
願いします。

2. 突然やつてきた不幸（前書き）

すみません！

またまた更新が遅くなりました・・・

あと、一つお詫びしなければいけないことがあります。

実は諸事情あって、2週間ほど更新することができません！

なので、次回の更新は再来週になつてしまつと思ひます・・・

本当にすみませんm(—)m

2. 突然やつてきた不幸

「」は杯戸町の事件現場。

「いや～ 今回も君の力を借りてしまったな！」

そう言いながら、田暮警部は新一の背中をぱしばしたたく。

「いえいえ、難事件ならこの工藤新一にお任せを！」

痛そうに背中をさすりながらも、新一は笑顔で答える。

「とりあえず事件は解決したし、もう9時だから君は帰るかね？」

「え！？あ、ほんとだ・・・ではお言葉に甘えて、今日はこれで失礼します。」

今回も事件に没頭していたため、時間が過ぎてこるのに新一は気

づかなかつたようだ。

窓の外を見てみると、真っ黒な空に星がきれいに光っていた。

そのまま帰らうとした新一を、慌てて田畠警部は引き留める。

「あ、なんだつたら車で送るが・・・」

「いえ、結構です。結構今回も近いので・・・では、これで失礼します。」

笑顔で颯爽と出て行つた彼を、警察の方々達は呆然とみていた・・・

一方新一は。

（また事件で遅くなつちまつたな・・・早く蘭に会いたい・・・

)

そう。さつき警部の厚意を遠慮したのも、急いで出てきたのもこのためだつた。

(ちょっと急がねえと。)

真つ暗で街灯も少ない夜道を、彼は一人で急ぐ。

でも、このとき急がなければよかつた。

あそこで渡りひとつしなければよかつた。

この後する後悔は計り知れない量となる。

いろんな偶然が重なって起ってしまった事実が、新一を苦しめる。

行きの道を覚えていなかつた新一は、勘だけで道を進んでいく。

（ん？たぶんここら辺で曲がって・・・）

焦っていた彼はどんどんスピードを上げていく。

（あ！駅の電気だ！）

そつ思つて信号も横断歩道もない道路を彼が横切つとした。

その時――――――――――――――――――

その時にはもう遅かった・・・・・・

「危なああああああい！――！――！」
誰かが叫んだ。

それにつられるように新一は横を向く――――――

キキイイイイイ！

ドンッ

あたりに鈍い音が響き渡る。

それと同時に、新一の体が数メートル先まで吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされた新一は——

まだからうじて意識はあった。

しかし、もう何も彼の耳には届いていない……

血まみれの自分を見て彼は状況をすぐに理解した。

(俺・・・・・死ぬのか・・・?・・・・・「めんな、

・・・

そこで彼の意識は途切れてしまつ——

そんな中で、遠くでサイレンの音が鳴っていた・・・・・・

#～～#

その頃工藤家では。

「久しぶりねーこの家に戻つてくるのも。」

「我が家の書斎を見ながら、有希子はほつとする。」

「そうだな。」

「本を読みながら、優作もくつろいでいた。」

でも、そんなひとときもつかの間だった。

「久しぶりに家族全員でどこかに行きましょうねー。」

「いいが、新一はどうするんだ? 事件とか学校とかあるだろ?」

「それは・・・。」

その時。

有希子の話を遮るよつて電話が鳴つた。

R R R R R R R R R

「あ、電話だわ」

何氣なく有希子は受話器を取る。

「もしもし、工藤です。」

『あ、工藤新一君のお宅ですか?』

相手の声は緊迫していた。

嫌な予感がする。

そう思いながら、普通を装つて返事をする。

「はい、私は新一の母ですけど、どうかされました?」

『実は彼、交通事故にあつたんです!-とてもひどい大けがで・・・・・』

『・・・・え?』

有希子の顔色が一気に青ざめてゆく。

『今、緊急手術中なんです!早く、杯戸中央病院に来て下さい!-!-』

そこで電話は切れた。

受話器を持ったまま固まつてしまつた有希子に、優作が声をかける。

「どうした?」

「あ、あのね、し、新ちゃんが交通事故にあつたって・・・・・今、

杯戸中央病院で緊急手術中・・・・う、うわあああああ「

そこまで話したところで、有希子は号泣しだした。

そんな彼女を、優作は受け止めている。

でも、少なからず彼も動搖していた。

「とりあえず、病院に早く行こう。話はそれからだ・・・・「

そして優作は、泣き続ける妻を乗せて病院へと車を急がせた・・・・

#～～#

杯戸中央病院では。

車を駐車場に止め、一人はいわれた手術室へと案内してもらつ。

やつとついたが、まだだつた。

『手術中』

このランプは、まだ赤々とついている。

その近くにあったソファード有希子は眠ってしまったが、彼はずつと起きていた。

息子が無事助かることを祈つて——

・5時間後。

よつやくランプが消え、酸素マスクをつけた新一が運ばれてくる。

有希子もそのままの音に気づいたのか、目を覚ましていた。

「新一は、新一はどうなるんですか？！」

つかみかかるように聞く彼女を、優作はなだめている。

「無事助かりました。数時間たてば、意識も取り戻すでしょう。しかし・・・」

「しかし・・・？」

「・・・彼には障害が残る可能性が高いんです・・・」

「な・・・ん・・・の？」

シーンと静まりかえった病院では、やけに大きくその言葉が聞こえた。

「頸椎損傷による下半身不隨です・・・」

新一の体に残された、命が助かるための代償は、あまりにも大きすぎた・・・・・

27 突然やつてきた不幸（後書き）

なんか今日はやけに長いです・・・。
あ、ちなみに下半身麻痺といつても、別に胸から下全部が動か・・・。

あわわわわ（汗）

次回のネタバレするとこでした・・・。

あと、もう一つの小説も、しばらく更新できません！
この場でお詫び申し上げます・・・。

引き続き感想やアドバイスなどお待ちしておつまむ！
これからもよろしくお願ひします！

- 「下半身不随つて・・・」
- 呆然と立ち尽くしている有希子の代わりに、優作が聞く。
- 「詳しく述べ、診療室でお話しますんで、こちらに来て下さい・・・」
- ・
- 申し訳なさそうな医師に連れられて、二人は診療室へと向かった・・・

「頸椎損傷による下半身不随とは、脳のこここの部分を損傷することによって起こります。それによって、通常は下半身、すなわち胸から下全体が動かなくなります。・・・が、」

「が？」

「彼の場合は運がよかつたのか、動かなくなるのが太ももとそこから下だけなのです。」

驚いた有希子は、少し希望を持つて医師に聞いてみる。

「つまり、車いすさえあれば、普通の生活はできるって事ですか？」
「そうなりますね。ですが、危険も多いので、最初のうちは息子さんについてあげて下さい。」

そう言われて、二人は固まる。

「わ、わかりました・・・・

たどたどしい返事をしながら、一人は新一の病室へと向かった・・・

#～～#

新一の病室に行つた一人は、ただただため息をついていた。

「やつぱり、新ちゃんを口スに連れて行くしかないのかな・・・・
「だろうな・・・・・」

有希子も優作も、今まで新一をほつたらかしにしていたことを後悔

していた。

何を思ったのか、有希子が新一のすぐそばにいすを持つて行き、新一の顔を見つめていた。

気がつけば、カーテンの隙間から光が差し、病室は明るく照らされていた。

「こんな平氣な顔してゐるのに、起きたらこのつらい真実を受け止められるかしらね・・・・」

そう言って、彼女は新一の顔をなでる。

「うつ・・・・」

知らず知らずのうちに涙があふれ、新一のほおをぬらしてゆく。

その時だつた――

「ん
・
・
・
・
」

「新一かわすかに暖きをし、目を開けていく

二人は駄け寄り、うれしそうな顔をする。一瞬霧廻気が和んだが、それもこの言葉を

一瞬霧因氣

「 ピーナッツ? あなたたちダレ? 」

「え・・・・・」

そう。

新一は事故によって、足の自由とともに記憶も失っていた・・・・・

・・・

#

蘭 side

ピンポーン

チャイムの音が響く。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

「ちよっと新一！？早くしないと遅れるわよー。」

事故のこと全く知らない私は、いつも通り新一の家に迎えに行つていた。

（もおー、昨日の約束また断るわ家から出でこないわビリゅうつもりよ！もう新一なんか知らない！）

怒りながら、私はいつも通り学校に向かう。

途中で、大親友の園子ともあつた。

「どうしたのよ、旦那と一緒にじゃないなんて。」

「何回チャイムを鳴らしても出てこないのー！」

ぶつきらぼうに答える。

「もしかしたら、事件で呼び出されたんじゃない？」

「・・・そつか。かもね。」

急におとなしくなつた私に、園子が声をかける。

「もしかして、昨日なんかあつた？」

「ううん、何でもない。」

見上げた空には、少し雲がかかっていた。

私の心の中にある不安を表すように、ざわざわ空を覆つていぐ。

また、会えなくなる気がした。

それも、前よりずっと楽。

まさかその時は、その不安が当たってしまつとは思わなかつた・・・

3～記憶喪失（後書き）

更新が遅くなりすみません・・・
本当に文章力無いですよね、私（Ｔ・Ｔ）
また、たくさんの方に感謝ありがとうございます！
これからもよろしくお願いします！

「やはり、記憶喪失ですね・・・」

重々しげに医師が伝える中、有希子が聞く。

「記憶が戻る可能性はあるんですか?」

「何ともいえません・・・ただし、彼の場合にはひどくダメージを受けているので。ほんとは、生きているのさえ奇跡なんですよ・・・

」

その言葉を聞いた二人は、もう決心するしかなくなつた。

「先生、私たち新一が退院したら、ロスに連れて行きます。」

「え? あの体で・・・」

「今まで、日本に住む新一が中学生になつてから仕事のため一人でずっとロスに住んでいたんです。会つのは年に三回くらいで・・・

」

医師も目を見開く。

「だから障害があり、そして記憶喪失にさせてしまった以上、もう

心配で一人になんかできません！」

「・・・そういう事情があつたんですね。では、あと一週間で彼を退院させましょう。」

「ありがとうございます。それでは、心配なので新一のところに行つてきます・・・」

きつぱり言った有希子は、優作を連れて新一の病室へと向かった・・・

・

#～～#

新一 side

「うは？」

僕は誰。

あの一人の人は誰。

びひつて僕はここにいる。

何もかも思い出せない。

それが、こんなにも苦しいことだとは思わなかつた。

考えても、考えても頭が痛くなるだけ。

窓からはまぶしい光が差し込んでいた。
近くに行きたくて体を動かしてみても、痛すぎて何もできない。

そこで、さつきの一人が入ってきた。
とても深刻そうな顔で、こっちにやってくる。

女の人がしゃべり出す。

「あなたの名前は工藤新一。『』普通の高校3年生よ。」
僕の名前は工藤新一……。

「そして、私たちはあなたの両親。私は工藤有希子。こっちは工藤
優作よ。」

僕の両親だつたんだ。

「あなたは私たちが仕事でロスに行っている間、一人で日本で暮ら
していたわ。」

つまり、ずっと一人暮らしだつたってことか。

「でも、運悪くあなたは私たちが日本に来ているときに交通事故に
あって、ここにいるの。」

そういうことだつたのか。

でも何か引っかかる。

何だろう。

「あの、いったい僕の体はどうなつているんですか？体中痛くて……」

とりあえず質問してみる。

「……っ新ちゃんの足はね、もう一生動かないの。」

「え……？」

「先生はリハビリ次第だつて行つてたけど、多分これからずっと車
いす生活……」

嘘だ。

嘘だあああああ！

いきなり田が覚めて。

何も覚えて無くて。

気がついたら車いす生活？

そんな・・・・

そんなの嫌だ！

真っ青になつてゐる僕を見たのか、有希子さんは僕に声をかける。

「だから、一緒に口スで暮らしましょへちなみに、敬語、じやなくていいから。」

「うん・・・・母さ・・・・ん」

「それでいいのよー、じやあ、一週間後に退院できるから、楽しみにしててね。」

やつと、母さんは病室を出て行った。

僕自身は全然楽しみじゃないのに。

ふと思いつき、足を動かそうとしてみる。

「ダメだった。もう、自分の意思でな動かせないと身にしみて思つた。

そんなことを考へてこねりながら、いつの間にか意識を失っていた。

そして、深い深い眠りへと落ちていく・・・

4～決断（後書き）

本当に文章力無いですね（Ｔ・Ｔ）

ところで、最近アクセス数を調べてみました。
すると、な、なんと・・・・・
3000アクセスを超えていました！
これも皆様のおかげです！

とこうわけで、これからもよろしくお願ひします？

5～記憶の欠片（前書き）

今回は全部新一視点です！

自分以外には、一人の女性の天使以外いない。

気がつけば、辺り一面は真っ白。

その天使は、純白の翼を持ち、白い服に身を包み、絶世の美女といつていいほどの美人だった。

静かにその天使が僕に話しかける。

「あなたは工藤新一君ですね？」

「は、はい・・・」

その天使がほほえむ。

「私はここで困った人々をお助けする天使。あなたの望みは何？」

「えー・・・と・・・」

困っているのを見たのか、天使が僕の考えていることを見透かす。

「もしかして、あなた記憶が無いの？だったら、前のあなたの記憶を少しだけ見せてあげる。」

「本当に？！」

「ええ。それじゃ、行くわよ。それっ！」

軽やかな天使のかけ声を聞いたとたん、たくさんの映像が映し出される。

まず、一つ目。

どこかの学校に、僕によく似た人と一人の女の子が入っていく。
その子は、髪の毛は真っ黒なストレートで、スタイルもよく、かわいい女の子だった。

『ねえ新一、早くしないと遅刻しちゃうよ…』

『わーつてるつて！そんなに急ぐなよ蘭。』

『 今日も熱々だね～お一人さん。』
『 つ、園子！』

新一？
蘭？
園子？

何が何だかわからない。

でも、少しだけ懐かしい感じがする。

それは、気のせいいか？

そして映像は一つ皿に変わっていく。

次に二つ皿。

また、僕に似た人とさつきの女の子が映っている。

でも、今回は私服だった。

後ろにビッグベンが見えるから・・・もしかしてこりはロンドン？

僕に似た人が彼女を無理矢理引き留めている。

『嫌あ！離して！！ヤア～！』

『厄介なんだよオメーは！』

『はあ？』

『オメーは厄介な難事件なんだよ！余計な感情が入りまくつて、た
とえ俺がホームズでも解くのは無理だろうぜ！』

何、何だこのシーン！

恥ずかしいような感じがして・・・

『好きな女の心を・・・正確に読み取るなんてことはな！』

「、告白？！」

『え？』

『ラブは〇だと？笑わせ・・・』

そこでいきなり映像が途切れる。

「あら・・・もう時間みたい。残りは自分で頑張ってね。」

天使が手を振ると、僕はどんどん何かに吸い込まれていく。

まるで、泥に吸い込まれていくみたい・・・

え？

「あ、新ちゃん起きたのね！びっくりしたわよ。6回目も寝つづけていたから……」

何だこの気持ちは。

何かが自分で渴んでこらえがして……

でも、少し懐かしかった。

少しほのとした氣もある。

あれは、夢だったのか……

気がつけば、元の病室にいた。

「ん……」

あれだけで6日間もたつていたのか。

「つてことは明日退院？！」

「そゆこと。」

つまり、この病院から出るといつこと。

少し、怖かった。

本来の自分を取り戻すことが。

天使が見せてくれた前の僕の記憶は、あまりにも信じられなかったから。

今の自分と違すぎる。

どうせなら、記憶を失った新しい工藤新一として生きたい。

そして、第2の人生を歩んでいきたい。

何で自分がそんなことを望むのかもわからない。

でも、もう元の工藤新一には戻りたくない。

だから。

「ねえ母さん、僕が事故で入院している」と、ほかに誰か知ってる

？」

「え？・・・もしかして、記憶を取り戻したの！？」

「違うけど・・・・・」

母さんはがっくりとうなだれる。

「私たち以外は知らないわ。でも、それがどうしたの？」

「ほかに誰にも知られないでロスに行きたいから。」

「なんで？」

「なんとなく・・・・・」

言つわけにはいかなかつた。

実の両親に記憶を取り戻したくないなんて・・・・・

「・・・・わかったわ。だったら、もう寝といた方がいいわよ？明日

朝早いから。

「わかつた・・・」

寝よつとある僕のそばで、母さんは必死に荷物をまとめている。

そして、早く畠山にならなかと願う。

早くこんなとこひから離れたいから・・・・・

夕日が沈んでいく中、彼の気持ちも沈んでいった・・・・・

5～記憶の欠片（後書き）

なんか新一のキャラが崩壊します・・・

記憶をとり戻したくないなんて・・・

それはさておき、最近冷えきましたねー
やっぱり制服のスカートだと、めっちゃむごですー。
皆様も、体調には十分ご注意下さい。

それでは、これからもよろしくお願いしますー。

6～旅立ち（前書き）

今回も新一視点です！

——ついでに日が来た。

今日僕は退院し、ロサンゼルスへ向かつ。

早朝に目を醒ました僕は、手続きを済ませた両親に車いすを押されて病院を出る。

「また日本とお別れね・・・・・

母さんが言つた。

「そうだな・・・・・寂しくないかい?新一。

父さんに聞かれた。

「ん・・・まあ。」

本当はちつとも寂しくなかつた。

記憶が無い上に、取り戻したくないから。

だから、早く日本を離れたい。

それが本当の気持ちだつた。

そして車に乗り込み、空港へと向かつた・・・・・

「さあ、飛行機に乗りましょう！」

なぜか両親とともに搭乗口へ向かつた僕たちは、誰も並んでいないのに乗ろうとしていた。

「あれ？ 誰も並んでないけど、もう乗るの？」

「だって私たちファーストクラスだもん！」

え？

ええええええ！？

ふ、ファーストクラス！？

海外行きの飛行機となつたらすごい値段なんじや・・・・

「これくらい平氣よ。さ、行きましょー。」

はあ・・・

といつあえず僕たちは飛行機に乗り込んだ。

機体が猛スピードで走り出し、やがて浮上する。

そして僕はロスへと飛び立つた。

もつ過去を振り返らぬために。

6～旅立ち（後書き）

あとひなつとでよつやくロスでの話に入ります。
なんかいじまで引き延ばしあきた気が・・・

それはともかく、最近予約更新にお世話になつてます。
結構便利ですよー

今頃の私はテスト勉強してるんだひな・・・

とにかく、これからもよひじへお願いしますー！

次の日の早朝。

新一と蘭が属する3年B組の担任、石谷信昭は学校に向かっていた。

そして、門をくぐる。

すると、何かがポストに入っていた。

それをポストから引っ張り出し、封筒を開けてみる。

そこには見たくないモノが入っていた・・・

中には一つの紙が入っていた。

広げてみると――

『

退学届

3年B組13番

工藤新一

『

「・・・! ?」

石屋は目を疑つた。

それは昨日の夜有希子があらかじめ入れておいたモノだった。

でも、一週間も学校を休んでいた彼が突然転校だなんて。

そして彼は急いでこの紙を教員室へと持つて行つた。・・・

} }

3年B組の教室では。

「今日も新一来ないのかなあ・・・・」
蘭はほおづえをつきながらため息をつく。

そんな中、担任の石谷が入ってきたためみんな一斉に席に着いた。

やねやねいへねこ母、出世がとひれぬ。

「・・・・工藤新一。」

石谷が新一の名を呼んだとき、誰から質問が上がった。

「せんせー、今日も工藤は休みですかー？」

「えつ・・・・・と・・・」

彼は答えるじとができない。

蘭は胸騒ぎがした。

石谷は意を決したのか、退学届について話し出す。

「実は、こんなモノが今朝学校のポストに・・・・・」

そう言つて退学届を広げる。

一クラス全員が息をのんだ。

「うそ・・・・・」

最初に反応したのは蘭だった。

「そんなんあつ・・・・・」

クラス中が混乱する。

いきなり蘭が立つた。

みんなそれにびっくりして反応する。

しかし、そんなの気にせず蘭は教室を飛び出した。

「ちよつと・・・蘭！」

それに続き、園子も教室を飛び出す。

そんな一人を、みんなは黙つてみているしかなかつた・・・

7～退学届（後書き）

はつかり言つて、先生の名前は適当です（^――^；

あと、今回は予約更新プラスすぐ投稿したことにより、2話一氣に更新しました。

まさに今、親がいないのを隙にやつています。

こんなんでテストは大丈夫なのでしょうか・・・

それはさておき、よつやく進んできました。

皆様の意見も取り入れたいので、感想よろしくお願ひします！

とにかく、これからもよろしくお願ひします（#^――^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559x/>

君を探して

2011年11月27日13時53分発行